

---

# ゆるゆり 百合（？）な日常

しっとりチョコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆるゆり 百合(?) な日常

### 【Nコード】

N2323Y

### 【作者名】

しっとりチョコ

### 【あらすじ】

ここでは、小説のことは超ド素人の私が短編集を掲載していきます。自分で読んでも駄文と思える作品なので、どうか暖かい目で見てくださいとありがたいです。様々なカップリングや思いつきシチュエーションなど、おもしろく書いていこうと思います。また、タイトル通り百合要素が混じってたりなかったりですがこれからどうぞよろしく願います。

また、カップリングやシチュエーションなどのリクも募集中です！

いやあー京結サイコっ

いろんな私的理由で不定期更新です。

ふと、思ったけど、駄文すぎてリクなんて来ないんじゃないじゃ…

## 京結な日常（前書き）

今回は定番である京結を書いてみました。  
最後まで読んでくれたらうれしいです。

また、誤字・脱字、読みにくいなどの意見がありましたら遠慮なく  
どうぞ。

文才についてはどうにもなりませんww

## 京結な日常

ピンポン

お昼になり、ちょうど昼食を食べようと思った頃に玄関のチャイムが鳴る。

「はい、どなた…」

「お昼食へにきたよー結衣いー」

…ピッ

即、インターフォンのボタンを押して切る。

まったく、あいつはどうしてこうもタイミングのいい時に来るのだろうか…。

4

まあ、いつものことなのでもうどうでもよくなっているけど…。

ピンポンピンポンピンポンピンポン

「…」

そして、今度は定番となりつつある連続ピンポン。

このまま続けられるとご近所に迷惑なので早足に玄関へ行き…

「結衣ーお昼食へにきて…」

ゴンッ！

「まったくお前は…いつも急だな。」

「結衣が寂しそうにしてそうだったから早く来たのにさー」

「寂しくなんかない」

今日もいつものごとく、私の目の前では京子が本日の昼食であるハンバーグを食べている。

…頭にたんこぶをつけながら。

「やっぱり結衣の料理はおいしいな」

「どうも」

「…あれ、結衣のハンバーグ、私のと違う」

「ああ。私のはケチャップがかかってて、京子のはチーズがのってるんだよ」

「ふーん。…じゃあさ、結衣」

「ん？」

「はい、あーん」

「!？」

突然、京子が私の前に一切れのハンバーグをもってくる。  
い、いきなり何を…

「結衣も私の食べたいでしょ？」

「そ、そんなこと……」

「いいから。はい、あーん」

「…あ、あーん」

パクツ…モグモグ

「おいしい？」

京子が首をかしげて聞いてくる。

「お、おいしいよ」

「へへ、さっすがあたしー」

「いや、作ったのは私なんだけどな」

「結衣、私にもあーんして」

「え……」

「ほら、早くー」

「じゃ、じゃあ…あ、あーん」

「あーん」

パクッ…モグモグ

「お、おいしい？」

「うん、おいしい」

ただ、京子と食べさせ合いっこしてるだけなのに…なんでこんなにドキドキするんだろ…

「ふうーごちそーさま」

「ごちそうさま」

お昼を食べ終えた私たちは食器を片づけてこの後何しようか考えた。だけど…

「ふああ…眠くなってきたなー…」

「私も…」

私たちに睡魔が襲いかかる。正直、このまま眠ってしまいたい…

「京子…寝る？」

「うん、寝たい…」

意見合致したので早いけどテーブルを片づけ、布団を引っ張り出す。

「結衣、おやすみー」

「おやすみ」

そして私は目をつぶる。

意識が奥に引つ張られ、私はそのまま眠りについた。

「まったく、あんなかわいいとこ見せられたら我慢するの大変なのに……」

結衣が寝た後、京子の目が開き、その本人の背中に向かって呟く。

「結衣…好きだよ」

そう言って、京子もまた眠りについた。

## 京結な日常（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。  
これからもよろしく願いします。

## 京綾のハプニングのちお泊り（前書き）

今回は京綾（？）で書いてみました。

一話目と同じような流れになってしまいましたが…気にしないように！

最後まで読まないで罰金バッキングムなんだからねっ！／／／

## 京綾のハプニングのちお泊り

「あれ、綾乃じゃん」

「と、歳納京子！」

溜まった生徒会の仕事が終わり、さて帰ろうと玄関口に向かうと、そこで歳納京子とはちあわせした。

千歳は今日は用事があると先に帰り、他の生徒会メンバーもとつくの前に下校している。

「こんな遅くまで学校にいるなんて、どうしたの？」

「私は生徒会の仕事で…。あなたこそ何してたのよ？」

「私は数学の補習ー」

「…あなたって人は…」

ハア…とため息つきながらも歳納京子だから…となぜか納得してしまふ。

「じゃあ、私はこれで…」

「綾乃、一緒に帰ろうよ」

「え！？」

「いいじゃん。もう外は暗いし、1人だと危ないでしょ？」

たしかに、今は曇り空のせいでいつもより暗い。女の子が1人で帰るってのも危ない。

「し、仕方ないわね。どうしてもというなら…」

「おし、じゃ帰ろっか」

そう言っつて、私たちは外に向けて歩き出す。

「あれ…げっ…」

歩いていると空からポタポタと雨が降ってきた。それも、次第に強まっていく。

「わわわ…どうしよう…」

周りは家ばかりで雨宿りできそうな所はない。どうしようかと思えてると…

「私の家、すぐ近くだから。走ろっ」

そう言っつと、京子は綾乃の手を握って走り出す。

「え、ちょ、ちょっと…」

いきなり手を掴まれてドキッとするが、今の状況では何も言えない。こうして2人は急いで京子の家へ向かう。

「あーずぶ濡れだ…」

ようやく京子の家についた。急いで走ったのに、雨は無情にも2人の体を濡らしていた。

「濡れたままだと風邪ひいちゃうから、お風呂入っちゃって」

そう言って京子はお風呂があるであろう、部屋のドアを指さす。

「わかったわ」

そう言っつて、綾乃はお風呂へ向かう。…京子の怪しげなにやけ顔に気づかずに…。

「ふう…気持ちいい…」

綾乃はいつの間にか入れられていた風呂に入りながらそうつぶやく。

バンッ

「お待たせー！」

「きゃあー！」

綾乃が驚くのも無理はない。京子がいきなりお風呂入ってきたのだ。しかも前を隠してない…。

「ちょ、ちょっと！ 前くらい隠しなさいよ！」

「えー女同士なんだからいいじゃん」

そう言いながら京子は体を洗い始める。

「と、歳納京子…」

「ん？ 何？」

「あ、ありがとね」

「いやいや、どういたしましてー」

そんな会話をしながら、京子は頭、体を洗っていく。

体を洗い終わった京子は、綾乃が入っている湯船へざぶーんという音を立てて入る。

「ジー…」

「な、何よ…？」

「やっぱり綾乃も結構あるね…」

「ど、どこ見てるのよぉ!？」

京子の視線と言葉の意味に気付き、慌てて手で隠す。

「いいじゃん別に減るもんじゃないしさー」

「そういう問題じゃないわよー!」

「ふうー気持ちよかったー」

「まったくもう…／＼／」

2人はこの後、お風呂から出て、それぞれパジャマに着替えた。外はすでに暗いし、時間も遅いため、綾乃は京子の家に泊まることになった。

「ゴメンね、お風呂だけでなく、泊めてもらって…」

「いいっていいって」

そう言いながら京子は自分のベットに潜り込んでいく。

「ほら綾乃、おいで」

そう言つて、京子はベットをポンポンと叩く。

「わ、私は床で寝るからいいわよ…」

「ダメだって。ほら、早く」

「で、でも…」

「…はあ」

突然、ため息をつく京子。そして、ベットから出て綾乃に近づき…

ガバッ

「わっ」

京子はいきなり綾乃に襲いかかり、ベットに押し倒す。

そして、自分もベットに入り、後ろからガツチリと綾乃に抱きつく。

「ちょっと…歳納京子お／＼／」

「…そんなに私と寝るのイヤ？」

「い、イヤじゃないけど…」

「だったらいいじゃん。早く寝ないと遅刻しちゃうよ？」

「…ふふっ…あなたからそんな言葉聞けるなんて思わなかったわ」

「ぶうーどという意味だよ、それー」

そう言い、2人はクスクスと笑いあう。

「…じゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

2人はこうして眠りにつ…

ガバッ

「ど、どうしたの、歳納京子？」

「…宿題…」

「……えええつつつ!？」

どうやら、2人の夜はまだまだ長いらしい…

## 京綾のハプニングのちお泊り（後書き）

今回も見ていただき、ありがとうございました。

誤字・脱字など意見がありあましたら遠慮なくどうぞ！。

何度も言いますが、駄文については温かい目で…（ry

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2323y/>

---

ゆるゆり 百合（？）な日常

2011年11月17日18時49分発行